「くらげのゆくえ」

作・サカイリユリカ

登場人物

男

女１

女２

【１　夢　】

舞台上には、長細い折りたたみ式のテーブルが脚を上に向けて逆さまになって置いてあり、それを覆うように一枚の大きな白い布がかけられている。
男がひとり、少し離れたところに佇んでいる。男は一言も発さずにこの場の様子を見ている・・・。
初老の女が一人、テーブル近くに立ちすくんでいる。
女１、ゆっくりとテーブルの傍にしゃがみ込み、「それ」に話しかける。

女１　お待たせ、ごめんね待たせて。寒くなかった？
おなかすいたでしょう、家に帰ったらご馳走作るからね、たんとお食べね。
さ、早く一緒に帰ろうか・・

女１、布越しにテーブルに触れ、そのテーブルを抱え込むようにおそるおそる抱きしめようとする。

女１　ああ、こんなにあなた大きかったかしら　ちょっと見ないうちに・・

女１、おもむろに布をめくって中を確認したかと思うと、床に突っ伏す。

女１　やっぱり違うわ、違う、あの子じゃない・・・

場が沈黙に支配される・・。
女２、登場。男の姿を目に認めると、無言で歩み寄り、

女２　あなた

ゆるやかに暗転する。

【２　決意　】

女１と女２が住む家。先ほどのテーブルは今度は脚を地につけてテーブルとして置かれており、その上に白い布がテーブルクロスのようにかけられている。
そのテーブルの上に突っ伏して寝ている女１のもとに、女２が外から帰ってくる。
女１、夢から目覚める。

女２　ただいま
女１　おかえりなさい　どうだった
女２　（首を横に振って）もう誰も。数か月前まではあんなにあふれかえっていたのに、
綺麗さっぱり
女１　難航しているんでしょうね　きっと
でもね、最近あの子が帰ってくるような気がしていて。
今もどこかでこっそり生きていて、ある日突然、
何事もなかったかのように帰ってくる・・・
なんだか、すべて夢だったんじゃないかと思えるの

女２、無言で鞄から書類を取り出し、テーブルに置く。

女２　これ、もらってきました
女１　（書類に目を落として）え
女２　もちろん、私だってあの人のこと、認めたくありませんよ。でも、

女１、女２が置いた書類を取り上げる。

女１　どうしてこんなもの・・・だいたい、結果もまだ
女２　ＤＮＡ鑑定ですか？あんなもの、いつまで待てばいいのか
もう最近は、待つことにすら慣れてしまって、
いえ、あきらめているわけではないのです　ただ私は
女１　あの子は、見つけてくれるのを待ってる、私たちしかいないじゃない、
どこかで寂しがっているだろうに。
私は・・あの子をもう１度この手に抱くことさえかなわないっていうの
女２　私だってあの日から、生きた心地がしません。たぶんね、あの日から私は
半分死んでいるのだと思います。それでもあの人を探して駆けずり回っているとき
はそういうことを少し忘れられた・・

女2、書類を書き始める。

女1　やめて、やめてったら！

女2　お義母さん　私だってこんなことしたくないですよ
でも私たちは生きていかなきゃならない　わかりますよね
これを出せば保険だって

女1、書類を女2からひったくるとびりびりに破いてしまう。沈黙が流れる。

女1　おかしいでしょう　だってあの子はまだ帰ってきていないのよ
見つかるまで待つのが家族でしょ

女2　家族・・・家族として今、してやれることってなんですか
今日、がらんどうの体育館に、小さな仏壇だけがぽつんと置いてあって、
気づいたんです　あぁ、そういえばもうじきお盆が来るんだなあって

女1　だからって今死亡届を出すことは

女2　選ばなきゃなりません　このままでいるか、先に進むか
私はこのままでいることには耐えられないんです

女1　どうしてよ　あなた他人だからそんなこと言えるんでしょう
血も涙もない・・・どうしてそんな

女2　お義母さん、お義母さんは毎日、自分が何しているのか知っていますか？
ずっと家にこもって、日がな一日、写真だの眺めて、

女1　やめて

女2　うわごとみたいに、あの人の名前を呟くように口を動かして。
それで何が変わるんです、

女1　こわいのよ、忘れてしまいそうで、いいえ忘れることなんてないのだけれど、
それでもね、あの子は毎日思い出しても思い出してもだんだん消えていってしまう・・思い出せなくなっていく気がするの、こわいの

女2、破かれた書類の破片を拾っていく。

女2　あのね、じゃあ、あの人の思い出を一緒に詰めませんか

無言で顔を見合わせる2人。静かに、仏壇用のおりんの音のような、
風鈴の音のような透き通った響きが空間に染みわたる――

【3　焼却　】

家の外の、庭のような場所。先ほどの長テーブルが白い布をかけられて置いてある。テーブルの上には、四角く平たい、調理用のステンレス製の銀色のトレイと、骨壺を思わせる容器が一つずつある。床にペットボトルの容器が置いてある。
その前で長細い箸を手にもち、佇んでいる女1。女1の前には女1が持っているのと同じ箸がもう一膳据えてある。
流れる沈黙――そこへ手提げ袋を両手に下げた女2がくる。

女2　お待たせしました

女2、女1に片方の手提げ袋を差し出す。女1、トレイの上に袋の中身を空けると、貝殻や食器の破片、写真、衣服の切れ端などがこぼれる。

女2　なにがいいのかわからなくてわたし
女1　そうね・・・

女2、床に置いてあったペットボトルの容器をもつ。

女1　なあに
女2　油です。燃やすから
女1　やっぱり止しましょうよ。何も燃やさなくてもいいんじゃ
女2　いいえ。燃やしてやらなきゃ浮かばれないでしょう
女1　でも
女2　お義母さん
女1　わかってる、わかってるの、私だってちゃんと
　ただこれを埋めたって意味がないわ
女2　・・・じゃあ砕きましょうか
女1　それはやるなら燃やしてからにしてちょうだい　あれは持ってきてくれた
女2　ああ、ええ

女2、もう1つの手提げ袋を女1に渡す。

女1、その袋をテーブルの上に空けると、そこからは大量の割り箸が出てくる。女1、それらを黙々と割って、パキパキと折り、トレイの上に乗せていく。

女１　なにしてるの　あなたも手伝って
女２　新聞紙も、要りますか
女１　いいわこれで
女２　わかりました

女２も、一緒に割り箸を割って折っていく。無音の中、その音だけが響いている。
割り箸がすべて折られると、女１はポケットからマッチを取り出し、
その山に火をつける。
火がはぜて燃えている。

【４　収骨　】

テーブルを挟むようにして２人の女が佇んでおり、長細い箸をそれぞれ持ち、
沈黙の中トレイの上で箸の先を彷徨わせている。

女１、静かにトレイの中から箸で「何か」を拾い上げ、見つめている。
女１、女２に拾い上げたものを箸渡しする。
女２、受け取ったものを傍らの容器の中に入れる。
・・・と、無言でこの動作が何度も繰り返されていく――
（これ以降、２人はずっと「何か」を拾い続けるのだが、それをマイムで表現する。）

女１　海辺に並ぶくらげを見たわ
何故だか一直線に砂浜に打ち上げられていて、
ちょうど朝陽に照らされたソレは、
水族館でみるような透き通ったからだを持ってはいなかった。
乾いた泥にまみれて、ただの白いかたまりみたいになってしぼんでいたの
じっと眺めていたのだけれど波に運ばれることもなければ
土の中に浸み込んでいくこともなかった
真っ黒い海に浮かぶ、かがり火をみたことがある？
女２　いいえ
女１　ちらちら光っていたわ　あとからあとからその火は絶えることなく燃えていた
水の上に仄かに揺れる、小さな・・
女２　くらげが燃えているのでしょうか？
女１　きっとそうよ。聞こえるの、波のざわめきが。
大勢の微かな声が。
ううん、もしかしたら風の唸り声かもしれない

女2、容器を自分の目の高さまで持ち上げる。

女2　私は聞き分けることができませんでした。あの人の声を。
見分けることもできませんでした。あの人の姿を。

女たち、見えない骨を拾いながら独り言をつぶやくように、息子、あるいは夫に語り掛けていく。

女1　ねえ、聞いてちょうだい。
あなたにはね、何人もお兄さんやお姉さんがいたのよ。
今度こそ、今度こそ、って自分にも言い聞かせてた。
あきらめなかったの、だって私の赤ちゃんだもの　そうやってあなたが生まれた

女2　あなたとの子ども、産みたかったわ
女1　私に似てあなた、背はあまりのびなかったけれど
女2　教えてあげましょうか、もう何年も前になるけれど覚えてる。
ちゃんと人の形をしてた。目鼻立ちもどこかあなたに似ていて、
今にも微笑みかけてきそうなくらい、愛らしくて
女1　鼻の横にあるほくろも、ちょうど私と同じ位置にあったっけね
女2　摘み上げたら、ものすごく軽くて、手のひらからつるりと排水溝に滑って
いってしまいそうだった
女1　あなた私におんぶされるのが好きでね、
よく疲れたって言ってはおぶさってきていたわ

女2　赤ちゃん　小さいうちはほとんど水でできてるの
お腹の中にいる時から、水で満たされているでしょう
女1　本当にやんちゃで、よく怪我もしたわよね

女1、おもむろにトレイの中のものに手を伸ばし、触れようとする。
女2、その手を思わず箸で払いのける。

女2　なにするんです
女1　（我に返り）ごめんなさい、まだあたたかいような気がして

女たち、息をぴったりと合わせたかのように箸をお互いにトレイに伸ばし、中にある「何か」を拾い上げる。
（これはまるで２人が同じ何かを掴んでいるかのように、マイムで表現する）
箸は空中でゆっくり離れていき、２人の女はその箸の先をゆっくり口に含む。

女２　しょっぱいわね
女１　磯のにおいがする・・

２人、お互いに顔を見合わせ、微笑む。
女２、静かに骨壺の容器を持ち上げる。
女１、女２から骨壺を抱き取り、懐に抱えながら海の方をみつめる。
女２も同じ方に視線を向ける。

女２　今日も海ではくらげが彷徨っているのでしょうか

間。

女１　あの日を見てた。身体がしなやかに弾んで、何度も弧を描いたの
部屋のテーブルも、イスも、お皿も、壁掛け時計も、全部時間が凍って、
女２　お義母さん
女１　指先まで小刻みに動いて、私は何度も体をよじって身震いした
女２　やめて、やめて、やめて・・・
女１　あの日のわたし。あの子が流されていくのを見ていた
女２　息が苦しくなって、懸命にもがきました
そうしたらいつの間にか、空が目の前に広がったんです
何が起きたのか、頭の処理が追いつきませんでした
・・冷静になって、お義母さんの顔が見えたので、
すぐにあの人のことも探しました。
女１　でも、いつまで経ってもあの子は浮かんでこなかった・・・
女２　どこまで流されていったのだろうと、目を凝らしましたが、
視界はぼやけてよく見えず、ただ海の途方のなさだけが私を襲っていたのです
女１　私たち、きっと同じときに一度死んでいたのね
女２　あの人がいなくなってからずっと海になんて近づけなかった
でも「あの人」が、おぉい俺はここだよぉお探してくれって
叫んでるのが聞こえるの。ううん、もしかしたら風の唸り声かもしれない

女１　ほら（トレイに残った灰を両手で優しくすくうように）
これが喉仏の骨。まだあたたかい・・
今まで誰にも見つからなかったなんて、嘘みたい

女1、テーブルの上にかけてあった白い布を、
テーブルの上に置いてあるトレイを包み込むように折り込んでいく。

【５　葬送　】

女たち、目を細めて周囲を見渡す。
遠くて近い海が、２人を包む。

女２　あたりがやけに明るいわ・・くらげが光っているのかしら・・・
女１　たくさん、たくさんよ・・

沈黙の余韻。

女１　私はいつしか静寂（しじま）と対峙していた。
くらげが見せてくれた夢があるの。
真っ黒な海に浮かぶ、ちらちらと燃える火。
水の上に仄かに揺れる、小さな命たち・・・

女２　足元の土は、光を帯びていた。
まばたきの間ね、ふうっと風が私を通り過ぎていった
あまやかな波がわたしを浸食していく

女１　ねえ、見えるでしょう
あそこにあるのが、あの丘があの子の鎖骨です
なだらかに、朝陽を浴びているのです
あの丘の土から、また新しい命がきっと芽吹くのでしょう・・

間。

女２　あっ、また光ったわ
女１　あっちにも、そっちにも、まだ散らばっているわ
女２　いきましょう

２人、もう1度テーブルの上の箸をとり、歩き出す。
かがみこんでは、見えない「何か」を拾い、合掌する。
２人、無音を聴き入っている――
静まり返った空間の中、無言でこの作業を繰り返す２人のシルエットが伸びていき――

（了）